

パレスチナの北部、ガリラヤ湖の漁師であったペトロは、イエスの招きに応えて弟子となつてイエスに従うようになります。当時の絶対的なローマ帝国のくびきから同胞を開放してくれる救世主としてのイエスに期待をかけていたのですが、愛と苦しみに満ちた十字架への道を歩むイエスを理解できず、イエスが逮捕されると、イエスとの関係を否認してしまいます。ペトロにとつて、復活のイエスが権限したことは、イエスのことを否認した自分への赦しと映つたに違いないし、驚くべき愛の啓示を意味したはずです。裏切つた自分に再びガリラヤに戻つてやり直そうという復活のイエスの言葉は、十字架の死が贖罪の死であり、復活のイエスがすべての罪を赦す愛の神ご自身であることを確信させたに違いないのです。

こうしてペトロは使途としての歩みを始めるようになり、同胞のユダヤ人だけでなく、ユダヤ教の律法の枠を超えて異邦人にもイエスの福音を告げ知らせ、初代キリスト教の成立と発展に著しく貢献したのです。その伝道の歩みは、人間の強さと弱さの中でイエスを愛し、イエスに従い闘いの歩みでもあつた。そして、ペトロはローマでの殉教の死を迎えたとされる。

本日の聖書箇所は、そんなペトロがイエスに対して信仰を告白する場面と、イエス自身が十字架上で死んで、三日目に復活するという受難予告を語る場面が描かれています。18節によると、イエスが一人で祈つておられた時、イエスが弟子たちに対して、「群衆は、わたしのことを何者だと言っているか」と尋ねられたのでした。弟子たちは答えます。民衆はイエスをヘロデ・アンティパスの命令で処刑された洗礼者ヨハネが生き返つた者、メシアの先駆者として終末の前に再来するはずの預言者エリヤ、あるいは預言者の一人ではないかと言っていると答えたのでした。

確かにイエスは預言者でした。イエス自身も預言者に関することわざを自分に当てはめています。「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」(マルコ6章4節、並行箇所)。しかし福音書が描くイエスは預言者以上の者でした。ペトロは20節で「神からのメシアです」と答えているからです。ここで、メシアと訳されているギリシア語は「クリストス」です。つまり、キリストのことです。メシアとはヘブル語で「油注がれた者」を意味し、それをギリシア語に翻訳したのがクリストスです。旧約聖書ではイスラエルの祭司や預言者、あるいは王が任職されるときは、その頭に油が注がれ、「油注がれた者」と呼ばれたのです。しかし、イスラエルだけに限つたことではなく、バビロン捕囚からイスラエルの民を解放したペルシアのキユロス王も「油注がれた者」と呼ばれました。イエスの活動と関連づけられている6章1節では「油注がれた者」は「貧しい人に良い知らせを伝えさせるために、打ち砕かれた心を包み、捕らわれた人には自由を、つながれている人には解放を告知させるために」神が遣わす者であると言われています。

このようなことから、イエスの時代には、メシアは終末時に待望される救済者の称号となっていたのです。

民衆の間では、ダビデの家系から生まれたメシアが、イスラエルを異邦人の支配から解放してくれて、ダビデの王国以上の栄光と繁栄をもたらしてくれるという期待があったのです。ペトロも民衆の一人として、そうした期待を抱いていたに違いないのです。ペトロをはじめとした弟子たちが、仕事や家を捨ててイエスの従ったのは、イエスの言動に偉大なカリスマ性を感じ、イエスの強い力にひかれたからでしょう。彼らは律法学者のようにではなく、権威ある者としてイエスに心酔し、イエスが行う癒しの奇跡や悪霊払いに感嘆したのです。そのイエスの周りに大勢の群衆が押し寄せる様子を見て、イエスに対するメシア的な期待感をますます膨らませていったのです。

弟子たちの心は高揚しました。ヤコブとヨハネはイエスを歓迎しないサマリア人の村を、イエスが望みさえすれば、天から火を降らせて焼き滅ぼすことができるという確信していました(ルカ9章51〜56節)。イエスは神の奇跡的力によって同胞をローマの支配から解放してくれると弟子たちは期待していたのです。しかし、イエスはペトロや他の弟子たちが期待していたメシアを否定したのです。

けれどもイエスは「悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくれる」父なる神の無制限の愛を説き、それに徹して生きたのでした。徴税人や罪人に神の国を約束し、「わたしに来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」と宣言していたのです。ですから律法の規則を守ることに躍りになっていくファリサイ派や律法学者たちにしてみれば、イエスは律法を基盤とするユダヤ教の価値観と体制を根本から揺るがす危険な異端者に思えたに違いないのです。ですから、イエスの命が狙われたのは当然の結果なのです。それゆえにイエスは死を覚悟しなければならなかった。イエスをメシアと信じるペトロや弟子たちにとって、メシアであるイエスの危険な振る舞いを理解し、受け入れることは難しかったのです。

だからイエスは民衆がメシア的な救済を期待していることを誰にも話さないように戒めたのです。そして自分に近い将来、訪れるであろう長老や祭司長、律法学者たちから排斥されるご自分の運命を弟子たちに話されたのです。そして、「わたしについて来たい者は、自分を捨てて、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」(23節)と言ったのです。ここで注目すべきことは、私たち信仰者が今の自分が背負っている十字架は何かという意識です。自分の十字架を自分の人生から排除できたら幸せになると考えるのは人としてのあたりまえの情でしょう。けれども、イエスは言うのです。「日々、自分の十字架を背負って私に従いなさい」と。この言葉は十字架をそっている者にとっては正直きつい言葉です。でも、自分の十字架を背負って生き続けるところから、見えてくる神の無制限の愛があるのです。そんなことを信じて歩みだしたいと思います。まずは自分の十字架が何であるかを見極めることが求められているのです。